大学生のスピーチ不安、面接不安、ゼミ発表不安に影響する要因の検討
―パーソナリティと対人不安の影響を中心に―

川畑　沙奈恵（指導：中村真教授）

キーワード：スピーチ不安、対人不安、性格特性

問題・目的

スピーチ不安とは、公衆の前で話をしたり、質疑応答を行うスピーチ場面の不安のことであり、日常よく経験されるものである。聞き手に自己のイメージをうまく伝えられるか否かが不安増減のカギになっており、評価懸念を中核とする対人不安のなかに含まれる（松宮,2003）。

本研究では、一般的なスピーチ場面に加えて、多くの大学生が経験すると思われるアルバイトの採用面接場面や、ゼミナールにおける自己紹介・レポート発表などの場面で喚起されるスピーチ不安を取り上げ、パーソナリティ特性との関連を検討する。さらに、対人場面で喚起される対人不安との関係性も併せて検討する。

方法

調査対象者と手続き：江戸川大学生100名（男性52名、女性48名）に質問紙調査を実施した。

質問紙の構成：①スピーチ不安尺度（Buss,1986；大渕,1991）に、新たに、大学生が経験すると思われるスピーチ場面を加えた計12項目（4件法）、②対人不安感尺度（岡林・生和,1991）の「聴衆不安因子」、「相互不安因子」の計14項目（5件法）、③状況別対人不安尺度（毛利・丹野,2001）の下位尺度である、「発表・発言不安因子」、「親しくはない相手不安因子」の計14項目（5件法）、④対人不安傾向尺度（松尾・新井,1998）の「否定的評価懸念因子」、「情動的反応性因子」、「対人関与の苦痛因子」の計18項目（4件法）、⑤公的自己意識尺度（押見ら,1979）7項目（5件法）、⑥Big Five尺度（和田,1996）外向性、情緒不安定性、開放性、誠実性、調和性の計60項目（7件法）。

結果

1. スピーチ不安の尺度構成

Buss(1986)および大渕（1991）の6項目に新たに6項目を加えた12項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。第1因子を「スピーチ不安」、第2因子を「面接不安」、第3因子を「ゼミ発表不安」とし、以降の分析に用いた。

2. スピーチ不安3因子と他の変数との相関関係

スピーチ不安3因子と対人不安感2因子、状況別対人不安感2因子、対人不安傾向3因子の間には、全ての組合せで有意な正の相関が見られた。スピーチ不安3因子とパーソナリティ特性5因子の間には、スピーチ不安と情緒不安定性、面接不安と情緒不安定性、ゼミ発表不安と情緒不安定性に有意な正の相関が見られた。スピーチ不安と外向性、調和性、面接不安と外向性、ゼミ発表不安と外向性、誠実性、調和性には有意な負の相関が見られた。

3. スピーチ不安に影響する要因を検討するための重回帰分析

スピーチ不安を基準変数とし、②と③を合わせた4つの因子を説明変数とする重回帰分析をスピーチ不安の因子ごとに行った。また、④、⑥を説明変数とする同様の分析を行った。これらの結果をまとめると、スピーチ不安に影響するのは、情動的反応性、聴衆不安、発表・発言不安、外向性（負の影響）であった。面接不安に影響するのは、情緒不安定性、情動的反応性、発表・発言不安であった。ゼミ発表不安に影響するのは、情緒不安定性、情動的反応性、対人関与の苦痛、聴衆不安、発表・発言不安であった（図1）。

考察

重回帰分析の結果、人前で自己紹介することや自分の意見を述べることに不安を感じやすく、対人場面で赤面が表れやすい人はスピーチ、面接、ゼミ発表のいずれの場面でも不安を感じやすい傾向が示された。そして、ストレスに敏感に反応して不安や緊張が高まりやすい人は、面接場面、ゼミ発表場面に不安を感じやすい。また、内向的な人はスピーチ場面で不安を感じやすく、あまり親しくない人との関わりに苦痛を感じやすい人は、ゼミ発表場面で不安を感じやすいことが示された。このように、ゼミ発表は他の場面より不安を高める要因が多く、大学生にとって最も不安を喚起されやすい場面であると考えられる。

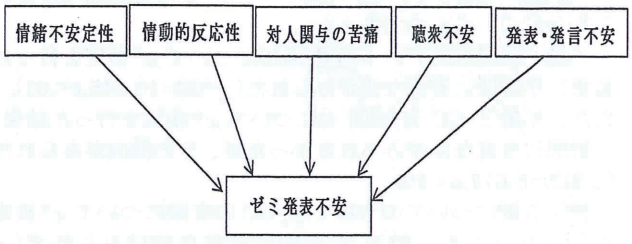

図1　ゼミ発表不安に影響する要因